

価格変動を抑えた新しいデジタル通貨 ステーブルコインとは

近年、「ステーブルコイン」という言葉を目にする機会が増えています。ステーブルコインは広い意味では暗号資産(仮想通貨)の一種ですが、価格変動の大きいビットコインなどとは性質が異なります。今回は、ステーブルコインの基本を解説します。

■ ステーブルコインとは

ステーブルコインとは、価格が大きく変動しにくいように設計されたデジタル通貨のことです。「ステーブル」は「安定した」という意味で、その名のとおり、円やドルなどの法定通貨に近い感覚で使えることを目指しています。

ビットコインなどの暗号資産は、需要と供給によって価格が大きく上下することがあります。一方、ステーブルコインは、特定の通貨や資産と連動させることで、価格の変動を抑える仕組みを持っています。たとえば、「1 コイン=1 ドル」のように設計されている場合、そのコインの価値ができるだけ1ドルに近づくように運用されます。

そのため、投資で値上がりを狙うものというよりも、インターネット上で送金や決済に使うための「デジタルなお金」に近い存在として説明されています。

価格を安定させる主な方法には、法定通貨と連動させる方法、国債などの資産で裏付ける方法、仕組みによって価格を調整する方法があります。

■ 仕組みによる分類

ステーブルコインは大きく3種類に分かれます。

①法定通貨担保型:

文字通り、米ドルなどの法定通貨に価値を裏付けられるタイプで、最も一般的で安定性が高いとされています。

②暗号資産担保型:

別のさまざまな暗号資産を担保にするタイプで、仕組みがやや複雑で価格変動リスクがあります。

③アルゴリズム型(無担保型):

あらかじめ設定された仕組みで、市場の需給に合わせ自動的に、コインの供給量や価格を調整するタイプ、担保があるコインと比べて価格コントロールが難しく、過去には大きな破綻事例もあります。

■ ビットコインなどの暗号資産との違い

	ステーブルコイン	ビットコインなどの暗号資産
価格変動	小さい	大きい
主な用途	決済・送金	投資・投機
安定性	高い(設計上)	低い
リスク	発行体に依存	市場変動



つまり、ビットコインなど＝「値上がりを狙う資産」として見られやすいもの、ステーブルコイン＝「価格の安定を重視したデジタルなお金に近いもの」という位置づけになっています。

■ なぜ注目されているのか

①海外送金の効率化

従来の送金は時間や手数料がかかりますが、ステーブルコインを使うと迅速かつ低コストで送金できる可能性があります。

②決済手段としての期待

価格が安定しているため、将来的には決済手段として普及する可能性があります。

③法整備の進展

日本でも2023年6月に施行された改正資金決済法により、法定通貨担保型のステーブルコインに関するルール整備が進み、銀行や資金移動業者などが発行・取り扱い可能になっています。

■ 注意すべきリスク

一見安全に見えるステーブルコインですが、リスクもあります。以下は一例です。

●発行体リスク

裏付け資産がどれほどストックされているのかは発行元から明確に明かされていないケースが多く、不十分な場合、価値が崩れる可能性があります。

●規制リスク

各国の金融当局による監視や制限の強化等、国ごとにルールが異なり、利用制限が変わる可能性があります。

●システムリスク

デジタル資産であるため、ハッキングなどのリスクも無視できません。

●信用リスク

裏付け資産の管理や監査体制が不十分だと価値が保証されない可能性があります。

●流動性リスク

24時間365日稼働するステーブルコインの決済システムでは、既存の銀行システムとの稼働時間差や市場の急変により、一時的に決済が滞る可能性があります。

●スマートコントラクトの安全性リスク(アルゴリズム型)

供給量の自動調整で価格を維持しますが、コードの脆弱性やバグにより資産が失われるリスクがあります。

■ デジタル円との違い

よく混同されるものに「デジタル円(CBDC)」があります。

※デジタル円(CBDC:中央銀行デジタル通貨)とは、日本銀行(日銀)が発行を検討している電子的な法定通貨です。 ステーブルコイン → 民間が発行 デジタル円 → 中央銀行が発行
つまり、ステーブルコインは「民間版のデジタル通貨」といえます。

■ まとめ

ステーブルコインは、価格の安定を目的に設計されており、決済や送金での利用が想定されています。一方で、発行体、規制、システムに関するリスクがあるため、仕組みや利用条件を確認したうえで利用する必要があります。

